

知的障害のある児童生徒の自己肯定感を育む授業づくり

— 小学校・中学校特別支援学級における体系的な授業モデルの開発 (2) —

梶山 雅司	中山 美代	高阪 英徳	城 一樹
小田原 舞	藤井 朋子	檜和田祐介	西 勉
落合 俊郎	若松 昭彦	川合 紀宗	竹林地 毅
氏間 和仁	林田 真志	木舩 憲幸	牟田口辰己
谷本 忠明	本間 孝信		

1. はじめに

近年、学校教育においては、複雑化、多様化していく社会の中で、自ら様々な課題の解決を図り、主体的に周囲と関わっていくための力を育てていくことが求められるようになってきている。そうした力の基礎となっているのが、周囲の他者との関係の中で自分が価値ある存在であることや自分の存在を大切に思う気持ちである自己肯定感であり、学校教育の中で、児童生徒の自己肯定感を高めていくことが求められている。

特別支援教育においても、障害のある児童生徒の自己肯定感を高めるための手だての検討が求められる。

特別支援学級で学ぶ児童生徒の状況を見ると、これまで経験のないことや困難なことに出会った時、不安や自信のなさから、課題に対して消極的な行動をとることが見られる。その結果、自分が何をどこまでできる力を持っているのか、課題に取り組む中でどう解決を図ればよいのか自信が持てないまま過ごし、もっている力を十分発揮する経験を積まないまま学校生活を送っている例も見られる。

小学校から中学校の9年間は、様々な問題を乗り越えて生きていくために必要な知識や技能等を基礎的な段階から定着・活用する段階へと継続して積み重ねていく時期であり、自己肯定感についても継続的に形成していく重要な期間だと考える。

本年度は昨年度の成果をふまえ、授業のあり方について具体的な方策を施すとともに実践を行ってきたことを報告する。

2. 研究の経緯

平成22年度より、附属東雲小学校と附属東雲中学校の特別支援学級の教員は、小・中連携協議会を通じて知的障害のある児童生徒の社会的自立をめざした授業づくりについて協議・検討を重ねてきている。

さらに、平成23年度からは、授業モデルの構築や授業仮説に基づく具体的な授業の指導案の検討をはじめ、授業構想や単元計画など小学校・中学校・大学が共同で研究を推進してきている。今年度は、これまでの成果や課題からいくつかのポイントをふまえた授業づくりを検討していく上で、児童生徒の個々の変容を捉えつつ個々の変容のデータを集約し、小学校・中学校という発達段階に応じた、段階的系統的な指導のあり方や体系的な授業づくりのモデルを模索していく。

3. 授業づくりのポイント(これまでの成果と課題から)

これまで自己肯定感は自尊感情をはぐくむ際に肯定的に働く感情ととらえ、「自尊感情を育む授業づくりを行うことで、自己肯定感が高まっていく」のではないかという仮説を立てた。自尊感情には基本的自尊感情と社会的自尊感情があるとし、日々の授業のなかで、教科等の特性を生かしつつ、学年や学級の実態に応じた内容で繰り返し実践していった。この実践の過程において、児童生徒の自発的・意欲的な言動が多くみられるようになってきた。この成果に至るまでの授業実践を整理していくと、次の5つのポイントが自己肯定感を高めるために有効な視点であることが明らかになった。

Masashi Kajiyama, Miyo Nakayama, Hidenori Kouzaka, Kazuki Shiro, Mai Odahara, Fujii Tomoko, Yusuke Hiwada, Tsutomu Nishi, Toshiro Ochiai, Akihiko Wakamatsu, Norimune Kawai, Takeshi Chikurinji, Kazuhito Ujima, Masashi Hayashida, Noriyuki Kifune, Tatsumi Mutaguchi, Tadaaki Tanimoto, and Takanobu Honma:
Lesson activities instilling self-esteem in students with intellectual disabilities: Developing the structured approach in special education classes at elementary and middle schools II

(1) 児童生徒が意欲・興味・関心をもっている教材(題材)を設定すること

これにより学習活動に対する意欲が増し、授業に積極的に参加することができるようになる。

(2) うまくいかないことをやり遂げる現実度を上げること

苦手な課題や初めて経験することについては消極的になりがちである。そこで、やり遂げられるかもしれない課題、もしくは少しの支援を受けてやり遂げられるような課題を設定することで、達成の現実度が増し、自己肯定感が持てるようになる。

(3) 活動量・活動の主導権を児童生徒の実態を考慮して適切に設定すること

授業全体における児童生徒の活動の量が適切であるのかを考えることが必要である。その際には、教師が主導するばかりでなく、児童生徒にやり遂げられるような部分を任せたり、それを実際にやり遂げたりすることができるかを、日々の行動観察から判断し、授業に取り入れ、活動量を工夫する。

(4) ほめる・認める場面を設定すること

自己肯定感が持てるようにするために「ほめる」ということが広く行われているが、「ほめ方」については個々に行うのか、全体で行うのか、いつ行うのか、だれが行うのか、どこで行うのかということ判断し、かかわっていく必要がある。

(5) 集団の力を活用すること

学校での学習は集団で行うことが多い。1対1の関係を越え、かかわりのあるすべての児童生徒の持ち味を生かせるような場面を授業の中に取り入れていき、集団ならではの力を活用すること。学級の中に安心感があり、その中に自分の居場所があることで自発的な発言や行動が促される。学級づくりと関連させて指導を行っていく。

また、課題としては達成感を感じるためのゴールイメージの明確化、賞賛や応援などの言葉かけの精選、自己肯定感に対する評価などがあげられた。

4. 研究の目的・方法

これまでの成果と課題をふまえ、小学校および中学校の児童生徒の実態に応じた授業づくりを研究仮説の構造図(図1)をもとに進めていきながら、めざす生徒像の具現化を図っていく。

その際の視点としては、以下の2点を設定した。

(1) つぎの点に留意しながら授業づくりをおこなう。

・児童生徒の実態に合わせて成果となる5つのポイントを意識した授業づくり

成果としてあげられた5つのポイントは平素の授業

づくりにおいても重要であるが、小学校、中学校の児童生徒の実態から特に重点的に取り組むべき点をしばり授業づくりにいかしていく。

・ゴールイメージを明らかにするとともに、どこで評価するのかを児童生徒へもわかりやすくした授業づくり

個々の児童生徒に対してどのような力をつけていくのかを明確にしながら、その時間におけるゴールイメージを児童生徒がもつことができるようにするとともに、それが評価につながるようにする。

・自己肯定感をどう客観的に見取っていくか、その方法の模索、検討

授業における取り組みを通して、実態としての評価や成果としての評価をどのように行っていくかを検討する。児童生徒の実態に応じて自己評価や他者評価などもとりいれていく。

(2) 授業を見直す。

・上記3つの視点から授業づくりを見直す

それぞれの視点について授業を分析していきながら、個々の児童生徒への支援のあり方や取り組みのあり方を改善していく。

・児童生徒の変容を見取り、授業の改善につなげていく

単元や授業を通した児童生徒の変容の具体に、より客観性をもたせるために多くの目でみとった姿を収集・集約し蓄積していく。その個々の具体の姿から単元構成や授業のあり方を検討、改善していく。

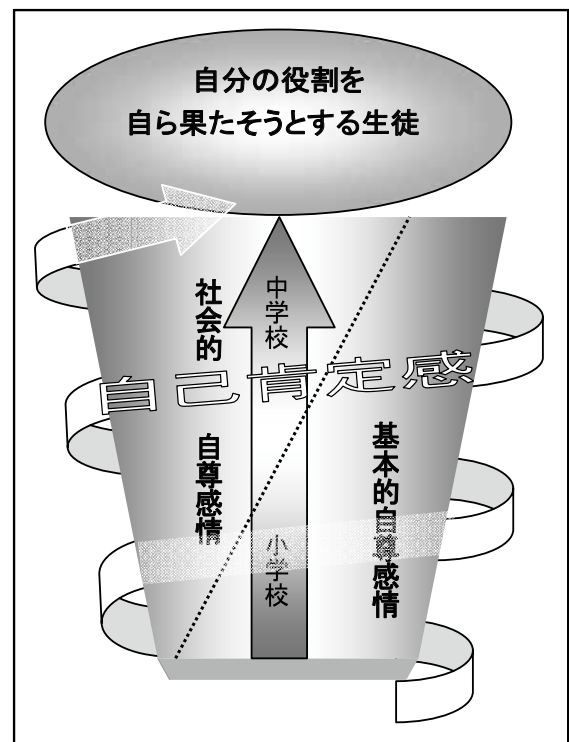


図1 研究仮説の構造図

5. 授業づくりの実際

昨年度の研究で明らかになった5つのポイントをそれぞれの学年や学級等児童生徒の集団の実態に応じた形で取り入れ、課題をふまえて実践していくこととした。これは、授業構想や単元計画の段階から検討を重ね、授業後においてもそのどこにこだわったか、その結果どうだったかをふり返ることで改善を行っていった。以下に指導例を示すが、特に意識してこだわったところを指導案中の吹き出しで示した。

(1) 小学校低学年の指導例

楽しむことをポイントにした授業

○図画工作科学習指導案

年組 小特別支援学級低学年(1年生2名, 2年生2名)

場所 小特別支援学級 低学年教室

単元 みんなでつくろう—あかずきんちゃんのもり—

単元について

本学級では、絵を描いたり色をぬったりして、自分の思いを表現しようとする児童や、ものの様子(形や色)をとらえたり説明したりすることが苦手で、絵で表現することにあまり興味を持ってない苦手な児童がいる。これは、描くための技能が身につけていないこともあるが、絵を描くおもしろさを感じたり経験したりすることが少なかったためではないかと考えられる。これまで、いろいろな画材を使って表現する活動や、みんなでひとつの作品を作る活動を経験してきている。

本単元は、クラス発表会に向けた一連の取り組みの中の図画工作科として位置づけた。ここでは、あかずきんちゃんの家からおばあちゃんの家までの道のまわりにどんなものがあるか、また森にどんな生き物があるかなどいろいろなことを想像させ、自分の思いをいろいろな方法で表す体験を通して、表現する楽しさを感じることができる。また、みんなが演じる場の雰囲気作りとして劇遊びの背景をみんなで作ることで劇遊びへの意欲を高めることができる。さらに、共

同制作することによって、友だちと一緒に活動する中で、表現のおもしろさに気づいたりまねしたりすることや、友だちと作品を作っていく楽しさを味わうことができる。

指導に当たっては、単元全体を通し、児童の実態や一人一人の思いを大切に、いろいろな表現活動を体験できるようにしていくことによって、絵で表現する楽しさを感じさせたい。そのために、児童の思いを表現しやすい画材(使いやすさ、おもしろさなど)や活動の場(紙の大きさ、場所、雰囲気など)を工夫したい。また、児童が自分のよさやがんばりを感じたり、絵で表現する意欲を高めたりできるような個に応じた支援を大切にするとともに、単元全体を通して、教師の肯定的な言葉がけに留意していきたい。

指導目標

- ・いろいろな画材をつかって表現できるようにする
- ・友だちと活動する楽しさを味わうことができるようにする

指導計画 全5時間(本時 第二次 第1時)

第一次 いろいろなものをつかって 3時間

第二次 楽しい森をつくろう 2時間

※ クラス発表会に関する取り組み全体については、本単元後、生活単元学習として引き続き実施していく。

本時の目標

森の様子を想像し、自分の使いたい画材を選び、楽しく表現することができる。

小中学校の取り組みのつながり

低学年では、学級という集団の中で、やりたいことを選んだり決めたりすることや、友だちと活動する楽しさを味わうことなどを通して、「基本的自尊感情」を育むことを重視する。低学年での様々な学びによって身につけた自分への信頼感や自信、集団生活における安心感などが、中学年以降の意欲的な学びへとつながっていく。

学習の展開

学習活動	目標行動(○)および支援(・)	
	児① ③ ④	児②
1 はじめのあいさつをする	・授業に臨む気持ちを作るために、姿勢を整えるよう言葉がけをする	
2 本時の課題をつかむ	<ul style="list-style-type: none"> ・「やりたい」という気持ちをもたせるため、 ・音楽(森の中にいそうな生き物の鳴き声など)をかける ・大きな画用紙を提示する ・描かれているものの紹介をする(家、道、池など) 	
3 森の様子を描く	○使いたい画材を選び、森の様子を描くことができる。	

<ul style="list-style-type: none"> ・絵の具(筆), パスで描く ・スタンプ(葉っぱ, 丸い形)をおす ・たんぼで描く 	<ul style="list-style-type: none"> ・使用できる画材を確認する ・使ってみたい画材を質問する ・森の中の様子を聞く (何が描きたいか, どんな様子か) ・森をイメージできるようにBGMを使用する 	
<ul style="list-style-type: none"> ・植物, 生き物, 家等を表す 	<ul style="list-style-type: none"> ○森の様子をイメージして, 表すことができる ・表現したものの話を聞く(何がどうしているのか) ・絵本(森の様子のある)などを用意しておく 	<ul style="list-style-type: none"> ○自分で選んだ画材で表現できる ・友だちの様子を見るようにながす ・指導者といっしょに活動する ・何を描いているか聞く
<p>本時のやられるのではなく 楽しみながら集団で活動するためのポイント</p>		
<p>4 ふりかえりをする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ひとりひとり表現したものの話をする 	<ul style="list-style-type: none"> ○楽しかったところやがんばったところなどを共有することができる ・できた作品を掲示する ・表現したものの話を聞いたり, 指導者が紹介したりする 	
<p>5 次の活動について知る</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・次時の学習に意欲をもつために, 何をするか見通しを話す 	
<p>6 おわりのあいさつをする</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・気持ちの区切りをつけるため, 学習の終わりを明確にする 	

(2) 中学校の指導例

集団の力を活用することをポイントとした授業

○「職業生活」学習指導案

年組 中学校全学年3組 情報・サービス グループ
7名 (1年生2名, 2年生2名, 3年生3名)

場所 中学校第3学年3組教室

単元 「私たちの東雲コーポレーション」会場準備

単元について

平成22年度文部科学省「特別支援教育資料」によると, この10年間で特別支援学校の在籍者数は約1.5倍になったが, 特別支援学校高等部卒業生の就職率の上昇はあまり見られない状況が続いている。特別支援学校(知的障害)高等部卒業者の職業別就職者数は, (国立特別支援教育総合研究所URL<http://www.nise.go.jp/cms/13,898,45,180.html> 2012.11.3)によると, 「昭和62年には全体の62%を「製造・製作」が占めていましたが, 平成19年には36%となり, それに代わって「サービス」「販売」「専門・技術」「事務」「運輸・通信」「採掘・建設・労務」などの業種が増えてきており, 職種が多様化が見られます。」とある。このことから従来のものづくりを中心とした職種から, サービスなどを提供していく職種へと, 就労の形にも変化が見られる。生徒の将来を考え自立と社会参加に向けた力を育成していくためにも, 早い段階から準備をしていく必要があると考え, 本校では平成24年度より「職業生活」を創設した。この「職業生活」では生産のための技能をつけていくことを目的にするのではなく, 働くことへの意欲や自ら働きたいという気持ちを育てていく事

をめざしている。職業生活の時間は, 週一回2時間目から6時間目までの5時間連続の授業としておこなっている。授業を「東雲コーポレーション」という会社に見たて, 生徒たちは会社の一員として授業に参加している。全学年3組(特別支援学級)生徒を各7名に編成した3グループ(担当部署)で会社組織をイメージして取り組んでいる。作業種別は「クラフト」・「食品加工」・「情報・サービス」の3つとし, それぞれが学期ごとにローテーションしながら, 1年間で全ての業種を経験できるようにしている。「情報・サービス」グループでは, 毎週連続5時間のうち午前中に2時間の計画で, 情報事務の学習を行っている。パソコンを使用して, 試食会・販売会・見学会等のチラシ作りやアンケート等の作成および集約, データ処理等を中心にした学習を行っている。午後の2時間はビルクリーニングおよび学校環境を整える活動を中心として行っている。この学習ビルクリーニングは, 時間内に作業を完結できるため生徒は結果を振り返ることができ, 自己評価を次の活動につなげることができる業種である。作業内容は機械などを使わずに, 中学校段階で実施可能な作業として, 手作業の取り組みを中心に行っている。具体的には, 自在ほうきでのフロア清掃, テーブル拭きなどである。ここでは基本的なビルクリーニングとして, 道具の取り扱いの練習から始まり, 慣れてきたところからフロアの清掃へと移行していった。また本校の特別支援学級では, 1年時から段階的に広島大学キャンパスを利用した職場体験学習を行っている。大学の協力を得て実際の仕事として

体験を行うことができ、大学で実際に働いている、障害を持つスタッフの方に、清掃作業の指導を受ける機会もあるため、働くということの具体的なイメージにつなげていくことができている。

本単元「私たちの東雲コーポレーション」～会場準備～では、「見学会・説明会」のための会場づくりを企画している。その準備を生徒らの運営により行なっていく、学校外から多くの見学者を迎え入れることを想定し準備を進めていくものである。

卒業後は特別支援学校の高等部に進学する生徒が多いため、将来の具体的なイメージができていない生徒もいるが、どの生徒も働く事を意識しており仕事に対して前向きに取り組む姿が見られる。実態としては、指示の内容の理解はできていても、うまく動作につながらない生徒や、繰り返しの指導を行うことで作業の定着を図ることができる生徒、なかなか自分の気持ちが表に出せない、自信が持てずに緊張してしまい、上手くほうきの操作ができない生徒、言葉掛けによって集中を持続することができる生徒など、実態も様々である。しかし、基本的な練習を繰り返し行っても、嫌がることもなく積極的に取り組むことができている。

今回は、「東雲コーポレーション」の一員として活動を意識させながら、個別に課せられた役割に責任を持って行うこと、清掃場所に合った活動や仲間と協力して働くこと、作業を丁寧に行うなどの力を育成していくことを目指して行っている。清掃活動は日常の学校生活でも行っているため、その延長として捉えてしまいがちであるが、この職業生活の中で行う清掃はビルクリーニング作業であり、「そこを利用する人たちが、気持ちよく過ごせる環境にする仕事」としての意識をもつことを目指している。指導にあたっては、広

島県特別支援学校技能検定での作業手順を基本とした「ほうき」、「雑巾」などの基本的な扱い方を定められた手順に従って練習している。

また、グループでの活動や、評価活動を取り入れていくことで、お互いを信頼し働くことに意欲と関心を持つことができ、その経験を繰り返していくことで、自己肯定感を高めていくことが可能であると考えられる。

指導目標

1. 清掃・環境整備業務の意識や役割を理解し活動できるようにする。
2. 仲間と協力し、役割と責任を持って活動できるようにする。
3. 活動に見通しを持ち、目的に沿って最後までやり抜くことができるようにする。

指導計画（全4時間）

1. 清掃業務の意義と役割、用具の確認（1時間）
2. 会場準備設営計画（1時間）
3. 会場準備（本時）（1時間）
4. 反省会（1時間）

本時の目標

自分の役割に責任を持ち、仲間と協力して活動することができる。

小中学校の取り組みのつながり

小学校段階から中学校段階において基本的自尊感情から社会的自尊感情の育成へと比重を変えながら、2つの自尊感情を育てていくことが重要である。このことから中学校段階においては、他者からの評価を受ける場面を学習活動の中に設定することによって社会的自尊感情を育み、生徒が自信を持って次の活動に挑もうとする態度・意欲につなげていき自己肯定感を高めていく。

学習展開

学習活動（□）と支援●（T1・T2）	指導上の留意点（◆評価）
1 活動内容と役割・目標を確認する。（10分）	
<input type="checkbox"/> 集合.あいさつをする。 <input type="checkbox"/> 活動内容を確認する。 <input type="checkbox"/> 全体の目標を確認する。 <input type="checkbox"/> 作業に日誌に個人目標を記入する。 <input checked="" type="checkbox"/> 具体的な目標になるように言葉かけをする。	<input type="checkbox"/> 正しい姿勢で挨拶できたか <input type="checkbox"/> 前時の記録を用いながら、自分の目標を確認するよう指導する。

<input type="checkbox"/> 本時の個人目標を発表する。他の生徒の目標をしっかりと聞く。 <input checked="" type="checkbox"/> 目標・活動内容を声に出すように促す。 <input checked="" type="checkbox"/> しっかりと聞けるように言葉かけをする。				
2 グループに別れ会場準備を行う。(30分)				
<input type="checkbox"/> 作業手順の発表・確認 ・グループごとに集合し手順の確認 <input type="checkbox"/> 指示書をみて作業に入る <input type="checkbox"/> ビルクリーニング作業 ・資機材準備 <input type="checkbox"/> 看板設置 1) 机移動 2) 自在ほうき 3) 塵取り 4) 机移動 ・資機材片づけ/準備 5) 机拭き/会場設置 <input type="checkbox"/> 片づけ	生①・⑥	生③・⑤	生②・④・⑦	生徒 ①・②・③-----1班 ④・⑤・⑥・⑦-2班 1班をT1 担当 2班をT2 担当 <input type="checkbox"/> スムーズに活動できるように最小限の言葉かけを行う。 <input type="checkbox"/> 生徒の良いところをほめる。
	<input type="checkbox"/> 指示書を受けとる。 <input type="checkbox"/> 手順をメンバーに伝える <input type="checkbox"/> チェックリストで確認する <input checked="" type="checkbox"/> わからないときは、担当教員に質問するように促す。	<input type="checkbox"/> チェックリストで確認する <input checked="" type="checkbox"/> わからない時はリーダーに確認するように促す。	<input checked="" type="checkbox"/> 注意を向けるように意識させる <input checked="" type="checkbox"/> 難しい場合は手順を教員と一緒に確認する。	
3. 振り返り (10分)				
本時の社会的自尊感情を高め自己肯定感につなげていくポイント				
日誌を記入 <input type="checkbox"/> 目標に対しての評価を行い記入する。 <input type="checkbox"/> みんなの前で日誌の自己評価をつかい発表する。 <u>仲間のよかったところを発表する。</u> <input checked="" type="checkbox"/> 自分の取り組みに自信が持てるように発表後、 <u>称賛の言葉かけを行う。</u> <input type="checkbox"/> あいさつをする。				
<input checked="" type="checkbox"/> 役割に責任を持ち仲間と協力することが出来たか。 <input type="checkbox"/> 正しい姿勢で挨拶するよう指導する。				

6. 児童生徒の変容

今年度、授業改善におけるポイントを意識した取り組みを小学校中学校で進めて行った。また、定期的な児童生徒の生活の中における見取りを行うことで次のような変容が見られた。

児童にあった形で成功体験をくり返すことやその場での評価が自分自身に自信をもつことができそれが次の活動へ意欲的につながっていると思われる。

表1 小学校児童の変容 (児童抽出)

	以前の様子	最近の様子
A	自分から活動する姿が少ない。指示されての活動。活動がすぐ終わる。	自分からやりたいことを選ぶ。言葉で表現する。活動を続ける。作業を自分で考えてする。
B	人前にでることが恥ずかしく消極的になることが多い。	劇など、多くの人の前でも台詞や動作をすることができる。「やりたい」と活動自体を楽しむ姿が多く見られる。

	運動が思うようにできないと、「できない」といって活動に対する意欲がもてなくなる。	成功体験を積み重ねることで、活動に対する意欲と自信をもつことができるようになっていった。
C	自分の思うようにできないと、泣いたりしてやる気をなくす。	成功体験を積み重ねることで、自信をもつことができるようになってきた。活動に対する見通しがもてるようになってきたことも影響していた。
D	文を書くことに対する苦手意識をもっていた。	活動に対する評価や共感を、その都度受けることで満足感と自信をもつことができている。
E	自分の気持ちを友だちに表現することができにくい。	第三者の気持ちを考えることで、自分の気持ちをより客観的にとらえることができるようになった。気持ちを友だちに伝えることができるようになった。

表2 中学校生徒の変容（生徒抽出）

	以前の様子	最近の様子
F	移動に時間がかかることが多く、遅れがちであった。また遅れると入り難さを感じ、動かなくなることがよくあった。	「遅れたら謝る」と認められる。謝ることができたことでほめられ、意識して行動する姿が見られるようになった。
G	何でも積極的にやろうとし、自分は他の生徒よりできるという気持ちが強い。	自分が苦手な部分も認め、他の友だちの頑張りを認めていくことで、友だちの頑張りを応援しようとする言動が見られている。
H	困ったことがあると以前はだまっただけで、先生に聞く、であった。	友だちと相談しようと、自分から関わろうとする様子が見られた。
I	できない、やりたくない、などを口にし避けようとするものが多くあった。	うまくできないなりに、やろうとする姿が見られた。「自分にまかされた役割」の意識が高まった。
J	空想していたり、集中していない状況が多くあった。	得意な歌、演奏などで他の生徒から認められる経験をし、他の人に関心を持つようになり、注意を向けることができるようになってきた。
K	うまくいっていないと厳しい言葉を発することが多かった。	他者の良い言動から学ぶことを通して、適切な指示を出そうと工夫するようになった。

取り組みの中で、その生徒の課題や実態を分析していき、周囲からの特に集団としての仲間としての影響や評価によってその姿が変容してきていると思われる。

7. 考 察

本年度研究してきたことから、分かってきたことを整理していく。

(1) 研究仮説の構造図（図1）

研究仮説の構造図により、小学校では主に基本的自尊感情を育むことを中心とした授業を構成していき、学年が上がる毎に少しずつ社会的自尊感情を育む要素を取り入れた授業を構成していった。また、中学校ではその社会的自尊感情の要素が大きくなっていくが基本的自尊感情を育む要素も取り入れていった。このよ

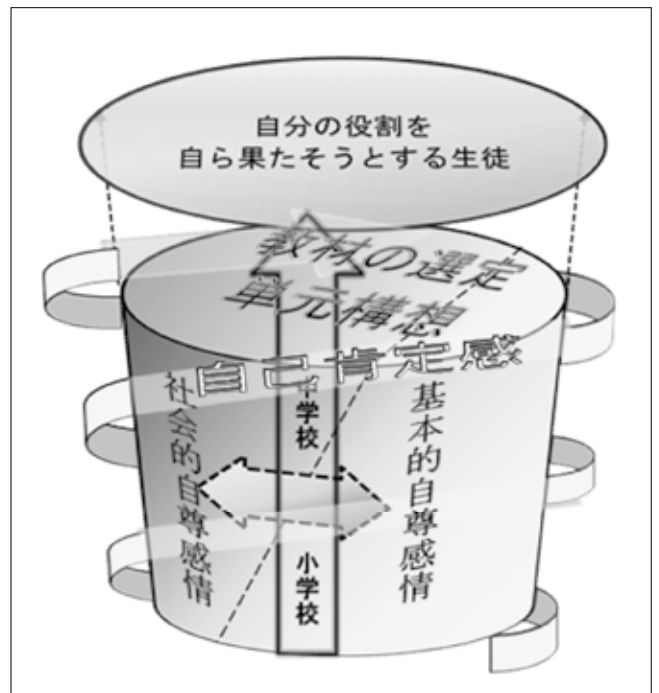


図2 自己肯定感を育む授業モデル

うな授業の要素を意識することにより、授業づくりにおいて重要である教材の選定や単元構想にひとつの意図をもって構成していくことができたと言え、授業づくりの大きな柱となった。そこで研究仮説の構造図を「自己肯定感を育む授業モデル」として図2のように整理しなおした。

(2) 基本的自尊感情と社会的自尊感情

自己肯定感を育む授業モデル（図2）を意識しながらの授業づくりで表1. 2に見られるような変容を見取ることができた。小学校では個人の変容ではあるが、それは集団で学ぶ中でお互いに刺激し合いながらいわば共有体験が土台となっている。また、中学校での取り組みにおいては友だちなど周りとのかかわりが土台となり他者を意識することで言動に変化が出てきている。

「基本的自尊感情」は、他者の比較や優劣といったものからではなく絶対的根源的な思いとして、自分はこのままでよいと思える感情である。また、「社会的自尊感情」は他者との比較や優劣に影響される感情で、プラスの評価をうけたり勝負に勝ったりすることで高まっていくものである。そういう視点からも変容を考えると、小学校の段階においては自分自身に自信がもてたり落ち着いて行動できるようになったりしてきていることや中学校では他者との関係から自分自身をとらえ直すことができていると言える。

(3) 相乗効果

児童生徒の変容を見ると、小学校では基本的自尊感情の高まりは次のステップとして他者の評価に意識が

向いていたり、中学校では社会的自尊感情の高まりは他者や集団との共同の体験を求めたりしている。「基本的自尊感情」を意識した授業づくりや取り組みは結果として「社会的自尊感情」を育むことになり、逆に「社会的自尊感情」を意識した取り組みは「基本的自尊感情」を育むことになっている。

(4) 成 果

これまでの取り組みと前述した児童生徒の変容の様子、考察から授業づくりにおいて次のことが成果として窺えた。

○体験的実生活の活用

小学校低学年の遊びなどの実生活レベルの段階から社会的な資源を活用する中学校の取り組みは大変効果的でありつながりもある。人の役に立つという段階的系統的な取り組みが広がっていきやすい。

○意識的な評価の場面の設定

自分のことをどう言語化して表現していくかが大切である。何気ない感想やつぶやきという段階に始まり相手に分かるように説明する活動まで言語化することに価値をおいた評価をしていくことが有効である。

○コミュニケーション場面の活用

人と話す、説明するという活動が自己肯定感の高まりに大きく寄与しているのではないかと推測された。かわることや教え教えられる中で自分の役割が分かったり自らやってみようとしたりする姿が生まれる。

以上のようなことから、児童生徒の実態から基本的自尊感情や社会的自尊感情を意識した取り組みを組み合わせる授業を構成していくことにより、めざす生徒像の具現化に大きな成果があったと考える。「基本的自尊感情」と「社会的自尊感情」はその取り組みや指導の偏りからくるアンバランスな成長にならないよう、本研究で明らかにした自己肯定感を育む授業モデル(図2)にあるように小・中学校での発達段階に応じた指導が9年間の学びのつながりになるのではないかと考える。

8. 課 題

一方で、取り組んできたことをどのように児童生徒の生活に返していくか、言い換えれば育まれた自己肯定感から自分の役割を果たす場を学校から生活へという児童生徒のまさに実生活につながっている取り組みを今後どのように社会的場面での生活に広げていくのが課題である。一般社会とのつながりを意識した生活への“汎化”が今後の課題としてあげられる。

9. おわりに

東雲小中学校特別支援学級では、めざす生徒像を「自分の役割を自ら果たそうとする生徒」としており、その具現化を図るための仮説として「自己肯定感を高める授業を継続して行うことで、自分の力を発揮し、それぞれの生活の場で自ら責任をもって役割を果たそうとする姿につながっていくであろう。」としている。そのための9年間の学びのつながりを意識した「小学校・中学校特別支援学級における体系的な授業モデルの開発」においていくつかの成果があげられてきた。児童生徒の変容も単に印象として捉えるのではなく評価の視点をもって捉えることで、結果として評価できる場面が増え自己肯定感の高まりを自他ともに認めることが多くなったことにもつながっている。今後も一層の取り組みの充実を図るとともに児童生徒の社会的な自立につながるよう取り組みを進めていきたいと考える。

引用(参考)文献

- 1) 平成23年度 東京都教職員研修センター紀要等11号 「自尊感情や自己肯定感に関する研究 第4年次」
- 2) 近藤卓 『自尊感情と共有体験の心理学 理論・測定・実践』 金子書房 2010.
- 3) 明橋大二 『子育てハッピーアドバイス ほめ方・叱り方1・2』 1万年堂出版 2010.2011.
- 4) 広島大学『学部・附属学校共同研究紀要2011 第40号』 広島大学学部・附属共同研究機構 2011.